一　万葉の人々の生き方を訪ねて

―杵島山と歌垣―

佐賀平野の西部に「歌垣山」と呼ばれる長く連なる山があり、三つの峰を平野から見ることができます。これが、杵島山です。杵島山（杵島岳）は武雄市、杵島郡北方町、白石町、有明町、藤津郡塩田町にまたがる、南北約九キロメートル・東西約四キロメートル、標高約三百七十メートルの低い山です。三つの峰の名は白岩山（比古神）、犬山岳（比賣神）勇猛山（御子神）といいます。杵島山は古代より全国的に名の知られた山であり、「※日本書紀」では、九州の山として阿蘇山とともに紹介されています。

また、杵島山は、古代に「歌垣」という行事がおこなわれてきたことでも有名です。「歌垣」とは、ひとりが和歌の上の句を詠み、これに他のものが下の句を詠む歌合わせと、歌を詠み合う人々の輪（友垣）を合わせて呼ぶようになったといわれています。

「歌垣」は、大地が生命力にあふれる春にはその年の豊作を祈り、作物が実る秋には収穫に感謝をするため、村里の男女が神々の住む山

杵島山の全景　（写真提供：白石町役場）

に集まり、輪になって歌を詠み合う行事なのです。

「歌垣」については、杵島山だけでなく、全国のさまざまな地域でおこなわれていたといわれています。ただ、現在、確認できるものとしては、摂津の歌垣山（大阪府能勢町）と常陸の筑波山（茨城県つくば市）があり、これに杵島山を加えて、「日本三大歌垣」と呼ばれています。

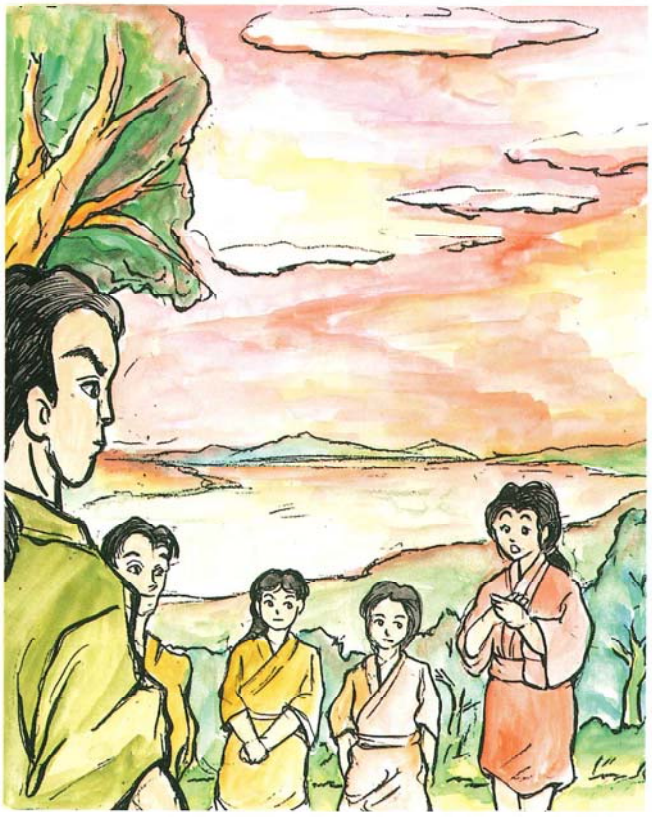
杵島山の「歌垣」については「肥前風土記」という書物にそのようすが記されています。

「風土記」は、七一三年に朝廷が諸国に作成させたもので、それぞれの地方の産業、生活、文化、風俗伝承などを記録したものです。その大部分は現在は失われており、常陸（現在の茨城県）、播磨（現在の兵庫県）、出雲（現在の島根県）、豊後（現在の大分県）と肥前の五つの国のものだけが残っており、当時の人々の生活のようすを知ることができます。

「肥前風土記」の中に次のように書かれています。

「杵島郡の南に、平野の真ん中に孤立している山があり、これを杵島という。この山には三つの峰があり、それぞれに比古神、比賣神、御子神という神がいる。毎年、春と秋には村里の男女が酒を持ち、琴を抱えて

歌垣のようす（想像図）



山に登り、酒を飲み、歌い踊る。その時に、詠まれた歌のひとつが、

『あられふる　杵島岳を峻しみと
　　草採りかねて　妹が手を執る』

であり、これは「※杵島曲」と呼ばれている。」

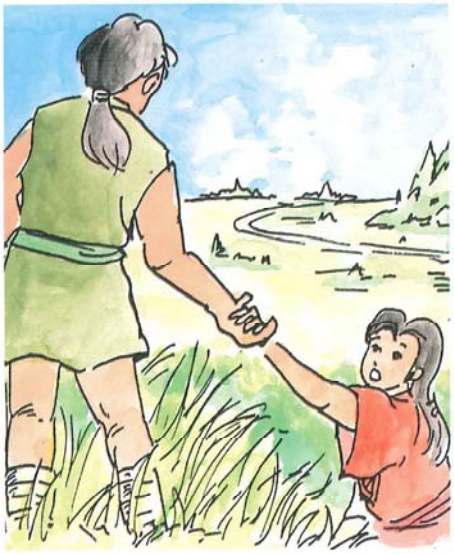
この歌は、奈良時代につくられた「※万葉集」の中にも書かれています。歌の意味は杵島岳があまりに険しいので草をつかみながら登ろうとしたがすべってしまい、思わず恋しい人の手をつかんでしまった、というものです。

以上のようなことから、「歌垣」は豊作への祈りや祝いから生まれた農耕での儀礼的な神事だけではないことがわかります。若者が集まり、琴や笛を鳴らして歌い舞う古代のディスコのようなものでもあり、また、男女が恋を語り、結婚相手を探す求婚（つまどい）の場でもあったのです。

この行事は、当時の都の華やかな王朝文化とは対照的な農民社会の自然に対する信仰とともに長い間、受け継がれてきた庶民文化であるといえます。そして、その伝統は現在でも、盆踊りや、田楽、田植え唄、神事芸能などと、形を変えながらも残っているといわれます。

歌垣の歌碑（白石町杵島山）

杵島曲にうたわれているようす



では、「歌垣」はいつごろ、どこで始まった行事なのでしょうか。

風土記に書かれていますから、少なくともそれ以前の六世紀前半からはおこなわれていたということが考えられます。

また、農耕を中心においた行事ですから、稲作とともに大陸から伝わってきたという考え方があります。最近の調査の結果、中国をはじめとするアジアの各地に日本の「歌垣」と同じような行事がみられることが分かりました。特に、中国の雲南省では、ミャオ族、タイ族、ハニ族など多くの少数民族の中で、現在も「歌垣」がおこなわれており、まるで万葉のころの日本人の姿をみるようです。

わたしたち日本人の祖先は、どこからやってきたのでしょうか。

わたしたちの文化の源流は、どこにあるのでしょうか。

そういう問題を知るうえでも、アジア各地に今もみられる「歌垣」は、日本人に何かを知らせてくれているような感じがします。